

聖書：ピリピ 3：10～11

説教題：復活に達したい

日時：2017年3月12日（朝拝）

パウロは8節で「それどころか、私の主であるキリスト・イエスを知っていることのすばらしさのゆえに」と言いました（口語訳聖書：「わたしの主キリスト・イエスを知る知識の絶大な価値のゆえに」、新共同訳聖書：「わたしの主キリスト・イエスを知ることのあまりのすばらしさに」）。パウロはこの言葉を、人間的なものを誇るユダヤ主義者たちを念頭に置いて語っています。パウロは異邦人への使徒として、異邦人世界で異邦人たちに「ただイエス・キリストを信じる信仰によって救われる」と教えました。しかしユダヤ主義者たちは、パウロが宣教した地に後からやって来て、彼の教えを否定して回っていました。「救われるためには信仰だけでは不十分。あなたがたは割礼を受けなければならない。イスラエルの様々な律法や儀式を守らなければならない。そしてユダヤ人にならなければならない」と。しかしパウロはこれらは人間的なものを誇るあり方（直訳では肉を誇ること）であって真の神の方法ではないと語って来ました。実はパウロもかつては肉を誇る者でした。どんなことを誇っていたかが4～6節に語られました。しかしパウロは今やイエス・キリストを知りました。主の弟子たちを迫害するためにダマスコに向かっていた途上で、栄光に輝く復活の主に会いました。その時、彼の価値観は全く変わったのです。彼はそれまで自分が誇りにしていたものをちりあくたと思うようになりました。それらは一切ゴミのようなもの、ガラクタのようなものであると。パウロはこうして人間が誇るものに救いがあるのではなく、ただキリストにこそ救いがあると語っているのです。そしてこの方こそが私たちの誇りであると言っているのです。

ではキリストを知ることのあまりの素晴らしさとは、もう少し具体的にどういうことなのでしょう。前回の9節では、まずキリストにあつて義とされる祝福のことが語られました。これはパウロがこれまで積み上げて来た義とは違って、完全な義でした。キリストの光の前ではパウロが勝ち取って来た義は価値のないもの、みすばらしく悪臭を放つようなものでしかありませんでした。しかしキリストがくださる義は完全です。この方により頼む者にはこの完全な義がただで与えられます。この義を頂いて私たちは神との正しい関係に初めて立たせていただくことができます。そして神からのあらゆる祝福が私たちに届くようになります。これが第一の祝福です。しかしキリストを知ること

にはさらなる祝福が含まれることが今日の節に語られています。神学的な言葉で言えば 9 節の義認に対して、10 節は聖化、そして 11 節は栄化の祝福とすることができます。

まず 10 節から見て行きます。新改訳は「私は、キリストとその復活を知り」と訳していますが、ここでまずパウロが言っているのは「私はキリストを知りたい」ということです。8 節で「キリスト・イエスを知っていることのすばらしさ」と言われましたが、さらにキリストを知りたいと言われています。これは人格的に、交わりを通して知ることです。そしてこの「キリストを知る」とは具体的にどういうことかの説明として、その後に「キリストの復活の力」と「キリストの苦しみにあずかること」を知りたいと言っているのです。

まずその一つ目は「キリストの復活の力を知りたい」ということです。先に見た義認の祝福は神の御前での身分変化のこと、神の前でどのように判断されるかという法廷的な事柄です。しかしこの 10 節で言われているのは日々の生活における新しいいのち、新しい力のことです。イエス・キリストを信じ、イエス・キリストにより頼むとは、私たちのために十字架上で死に、復活されたキリストの復活の力に生かされることなのです。ぶどうの枝がぶどうの木につながっているなら、ぶどうの木に流れているいのちそのものが枝に流れ込んで来るように、私たちはキリストとつながることによって、キリストの内に満ち満ちている復活のいのち、祝福のいのちに生きるのです。パウロはそのキリストの復活の力を日々の生活の中で知りたいと言っています。すでに信者はこのキリストの復活の力に生かされていますが、その素晴らしさを益々キリストに信頼する信仰の歩みの中で深く知りたい、この身に体験する者でありたいと言っているのです。

この「キリストの復活の力」を知ることとセットになっているのが、その次にある「キリストの苦しみにあずかる」ということです。私たちはキリストの復活の力にはあずかりたいが、キリストの苦しみにあずかりたくないと思うかもしれません。なるべく苦しみには関わりたくない。しかしそういうわけにはいきません。私たちはキリストのどんな姿を素晴らしいと思っているのでしょうか。スーパーマンのように栄光に輝く姿を、でしょうか。そうではなく、神である方が私たちのためにへりくだって人となり、十字架上にご自分の尊い命を投げ出してまで仕えてくださったその愛のお姿に私たちは深く感動し、この方を賛美しています。そして私たちがもしこの方に本当に感謝し、

この方にいくらかでも似る者になりたいと思うなら、そこにはキリストの苦しみにあずかるという面が当然含まれて来なければなりません。イエス様も多くの箇所ですべて「わたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、日々自分の十字架を負い、そしてわたしについて来なさい」と言われました。あるいは、この世はわたしを迫害したのだからあなたがたをも迫害しますと言われました。またパウロも言いました。使徒の働き 14 章 22 節：「私たちが神の国に入るには、多くの苦しみを経なければならぬ。」 II テモテ 3 章 12 節：「確かに、キリスト・イエスにあって敬虔に生きようと願う者はみな、迫害を受けます。」 私たちがキリストの側に立つなら、この世はキリストを十字架につけ、殺した世なのですから、私たちも同じ扱いを世から受けるだろうことは当然予期されることです。またイエス様とともに御国が来るために仕えることには様々な労苦や犠牲が当然必要になって来ます。しかしそれは神からのプレゼントであるとすでに 1 章 29 節で言われました。「あなたがたは、キリストのために、キリストを信じる信仰だけでなく、キリストのための苦しきをも賜ったのです」と。「賜った」というのは恵み深いプレゼント、ギフトということです。それは私たちへの祝福として与えられるのです。

この苦しきを考える上で二つのことを心に留めたいと思います。一つはここで「キリストの復活の力を知ること」が先に語られ、その後で「キリストの苦しきにあずかること」が語られていることです。普通は順番が逆ではないかと思うかもしれません。苦しきや死が先で、その後に復活ではないのかと。確かにイエス様が歩んだ順番はそうでした。しかしここに私たちが置かれている恵みの状態が示されています。すなわち私たちはキリストの復活の力に生かされることとセットでキリストの苦しきにあずかるということです。ただ苦しき道を進むのではないのです。キリストの復活の力に支えられつつ、キリストに従う苦しきも経験するのです。恵みに支えられた上での苦しきなのです。

もう一つはここで「あずかる」と訳された言葉はギリシャ語のコイノーニアという言葉で「交わり」と訳される言葉であることです。つまり私たちはこの苦しきを一人で経験するのではない。そこにはキリストがともにおられるのです。キリストとの交わりがそこにあるのです。この苦しきの奉仕の中でこそ、私たちはキリストご自身とのいよいよ深い交わりに生かされるのです。

そして 10 節の最後では「キリストの死と同じ状態になり」とまで言われています。

これは苦しみの究極としての殉教の死のことかと思うかもしれませんが、ギリシヤ語の時制では現在形が使われています。ですからこれはクリスチャンが日々経験するものとして語られています。つまり私たちはある程度までの痛みまではキリストとともに行くが、それ以上は進まないというのではない。キリストの復活の力に支えられつつ、「死」と表現される状態にまで進んでも大丈夫ということです。Ⅱコリント4章10～11節：「いつでもイエスの死をこの身に帯びていますが、それは、イエスのいのちが私たちの身において明らかに示されるためです。私たち生きている者は、イエスのために絶えず死に渡されていますが、それは、イエスのいのちが私たちの死ぬべき肉体において明らかに示されるためなのです。」

さて、このように「痛み」や「死」と聞いて、私たちは思わず顔をしかめてしましますが、そこで話が終わっていないことが素晴らしいと思います。最後11節には栄化のことが述べられています。最後に到達するゴールのことです。パウロはここで「死者の中からの復活に達したい」と言っています。これはキリストの再臨の日における復活の出来事を指しています。信者に約束されている全き栄光への復活です。栄光のからだへの復活です。パウロはこの後、3章21節で復活のからだのことをこう述べています。「キリストは、万物をご自身に従わせることのできる御力によって、私たちの卑しいからだを、ご自身の栄光のからだと同じ姿に変えてくださるのです。」そしてⅠヨハネ3章2節では、私たちはこの日に初めてキリストのありのままの姿を見ると言われています。栄光のキリストを直接見、そのキリストを映し出すような者となっている自分自身を見るのです。罪のしみも痕跡もない完全なキリストの似姿です。

この祝福を見つめつつ、前の節との関連で思うことは、この栄光に至るために10節の聖化の歩みが必要であるということです。栄光に達するには苦しみの道、キリストの死の様にまで結び合わされる道を通ることが必要。それが、私たちが栄光へと造り変えられて行くために必要なのです。一見矛盾するように聞こえますが、キリストの痛みにあずかり、その死の状態にまで導かれることが栄光へ至る道なのです。

11節の「どうにかして」という言葉も注目に値します。つまり最後の栄光に至る歩みは簡単ではないということです。戦いがあるということです。もちろんパウロはこの結果、自分が栄化の状態に達することができないかもしれないとは思っていません。1章

6 節で見ましたように、救いのプロセスを始めてくださった神は最後まで私たちを恵みによって導いてくださいます。しかし私たちの側では戦いが必要になる。奮闘努力が必要になる。決してそれは楽なものではない。パウロは 10 節の歩みを経て「どうにかして」11 節の栄光の状態に達したいと言っています。こうした取り組みを経てついに「死者からの復活」という最後の栄光の状態に達するのです。私たちがその状態に達する時、世界全体もリニューアルされると聖書は語っています。神の全き臨在のもとで、新しい天と新しい地が現れます。神の全き祝福で満ちる栄光の状態に入るのです。

このような祝福がキリストに信頼し、より頼む者の先にあります。これに比べたら、地上の宝、地上の国の栄光は一体何ほどのものでしょうか。人間的な誇り、肉の誇りは一体何でしょうか。それはまさにちりあくた、あるいはゴミのようなものではないでしょうか。私たちは何を自分の誇りとし、あるいは土台として歩んでいるでしょうか。やがて神の前に出た時に、それらが全部ガラクタであることが判明するような、そのようなむなしいものによりかかっていることはないでしょうか。ちりあくたやふん土のために一生懸命、自分の人生の貴重なエネルギーを費やしていることはないでしょうか。そうならないように、イエス・キリストを求め、キリストと交わる祝福こそを求めるように！とパウロは語っています。キリストは私たちに完全な義をくださいます。完全な聖めをくださいます。そして永遠に至る栄光を与えてくださいます。キリストがこの道を備えてくださったことを感謝して、私たちはキリストこそを誇り、キリストにこそ頼る歩みへ進みたいと思います。この方を求め、この方を日々知る交わりの中で最後の栄光の日を目指し、かの日には心から神とキリストに感謝するこの祝福の道を進みたいのです。